

Title	白井浩司さんが定年だと云う
Sub Title	
Author	横部, 得三郎(Yokobe, Tokusaburo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.354- 356
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0354

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

白井浩司さんが定年だと云う

横 部 得三郎

若いと思っていた白井浩司さんが来年(昭和五十八年)三月に定年だと云う。驚ろくべきことだ。私は慶応義塾に定年制が占かれた時の第一号該当者であつて七〇歳で退職した。今から十四年前のことになる。文学部の学生となつた時は未だフランス文学科は無く泰西文学科に入つたのであつた。卒業したのは大正十三年で仏文科の第一回卒業生である。振返つて見ると慶応義塾に入つたのは大正八年で六十三年前のこととなる。

私の出身校、小千谷中学に故西脇順三郎(私どもは順様と呼ぶ)の弟、経治郎が居て三高を受験し現役で合格した。そこで私も京都まで三高受験に赴いたが失敗し、一つ違いの兄が慶応義塾の法科に居たし、家でも薦めるので慶応を受験することにした。私のうばが日本橋の西脇の店で働らいていたが、縁あつて大工の棟梁と結婚し

家を持ったので其処に下宿し受験準備をした。当時順様は慶応義塾大学理財科を卒業し、ジャパン・タイムズ社の記者をしていたが、英語を見て呉れた。毎朝早く順様の家に習いに通つた。順様は紋付きの羽織袴で書取りをして呉れた。書取りをしたのは黒い部厚いノートであつた。辞書から取つた例文の書取りもあつた。勉強も兼ねてペイターの「メアリアス・ジ・エビキュリアン」も講読して呉れた。

当時東京に来るには小千谷から長野に出て善光寺にお詣りして一泊、信越線で来るのである。上越線が拓かれたのは昭和七年で留学の前年のことであつた。

大正八年に理財科の予科に入学すると十五組あり、終りのM組N組だけがフランス語であつた。手解きは広瀬哲士先生で文法をやらすいきなり *C'est un livre* を習つた。アテネフランセに入ると丸山順太郎氏が全く日本語を使わない。三ヶ月熱心に通つたが勉強が過ぎると家族皆に止められてしまった。二年目のフランス語の先生は山本直文氏であつた。フランス人ブリュニエの授業も

あった。当時二年間であった予科を終え本科の一年を終えて文学部に転部し泰西文学科の一年に入り直した。ドイツ語に後藤純三、史学科に友松円諦えんたい、吉田小五郎が居た。翌年フランス文学科が出来た。同級生は五名で祖父江君のみが数年前まで生きていた。当時は昼休みが長く、後藤末雄さんが昼休みにフランス語を教えに来たが翌年慶応の専任になられた。仏文学の先生は広瀬さんと井汲清治さんである。井汲さんが健在なのは芽出度い。前田越嶺先生がラテン語を教えていて生徒は私一人であった。和辻哲郎先生が古典研究を担当していてホメロスで文献学の手解きを受けたが難かしかった。卒業の前年、大地震で本を一切焼いてしまったが片瀬で療養中であった母の所に置いてあった一冊のラテン語辞書のみ助かった。卒業論文にはウェルギリウスを採り上げた。卒業後、井汲さんの推挙で名古屋高商のフランス語教師となった。当時、中平解さんが名古屋放送局にいて、二人で組んでフランス語講座を放送したことを想い出す。クラスには山中散生がいて、これも放送局に入り、

よく飯を一緒に食べた。(勿論、酒も飲んだ)。昭和八年に名古屋高商から「ラテン文学研究」ということで文部省留学生としてフランスに向った。私費であったが資格のみ文部省留学生とするために総額六十円の支給を受けた。一ヶ月船に揺られマルセイユ、そしてパリに着く。リヨン駅からホテルに向って歩いて行くと床屋が明いていたので入った。Il n'y a pas beaucoup de monde ce matin と云うと Puisque c'est un dimanche と云われ、日曜日だったかと気付いたのを覚えてる。ラテン語のマルゾー先生の授業に出たが、専ら熱心に通ったのは音声学のフーシェ先生のクラスだった。フーシェ先生の家で日本の歌を歌えと云われ断わり切れず己むなく全員に起立して貰い「君が代」を歌ったことがある。写真撮ると必ず一番端に写っているのでフーシェ先生から Vous êtes vraiment Extrême Oriental とからかわれた。ギリシャに一ヶ月、イタリアに一年二ヶ月滞在し四年半があつと云う間に過ぎ帰朝の決心をした。当分何もしたくなかつた。慶大図書館に入れと云う人もあつたが

永田清君が教師になるべきだと云い、病氣中の戸川秋骨先生の代講として文学部予科で英語を教えた。この相談は井汲さん永田君と銭湯の湯舟の中でしたのだ。高橋広江君が留学したあとを教えたり高等部でラスキンを教えたり藤原工大で教えたり教員となつて働らいている中に戦争が激しくなつた。学生宛の赤紙が教務課に届くのを渡すため学生を自宅に探し出して渡す辛い仕事もあつた。

戦後は大学院も出来、ラテン語、古仏語を受持ち松原君の息子から鷺見君まで教えた。色々なことをやって来たものだ。定年後も京都外国語大学で十年以上教えることが出来た。

白井さん、定年で責任の重荷を降ろし、再び若返つて自分の楽しい人生に充実した一步を踏み出して下さい。

(元本塾大学教授)

仏文科の初期

松原 秀治

慶応の文学部に仏文科が何時出来たかと云えば、昭和四九年(一九七四年)発行の仏文科同窓会名簿に、「明治四三年仏文学の講座が開設される。担当者永井壯吉(荷風)」と載っていますから、この年だと見てよいのだと思います。尚同書に「明治三七年仏語が正規科目必修科目となる。担当者田中一貞他」とあるのは、フランス語は明治中ごろになつて慶応に始めて正式に取り入れられたと云う事を示すものと思われます。(それまでは英語一本だったのでしょう。)

しかし永井荷風はその後(大正五年)旋めぐりを曲げて学校を辞任しているので、慶応の仏文科はここで一度消えたのではないかと思ひます。勿論教授科目としてのフランス語は失くなくなったわけではなく、私自身もその前からフランス語の授業を取っていましたが先生は前田長太(越